
題名のない物語

サンソン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

題名のない物語

【Nコード】

N4313C

【作者名】

サンソン

【あらすじ】

ある日町の人たちが消え去ったそれを救い出そうとするマサルの冒険ファンタジー

第一章

初めましてサンソンといいます。この小説は別の掲示板で投稿していた物をちよつと編集した物です。

多くの人がこの小説を読んでくれることを期待しています

題名のない物語（第1章）

始まりの日

いつもと変わらない日と思っていた。

今日も授業が、終わり部活に行き、そして家へ帰る。

そんな毎日がこの日を境に変わってしまった！

「マサル！おきなさい！ほら早く遅刻するわよ！」

「う・・・眠い・・・」

「そんなこと言っていないで顔洗ってきなさい」

「わかった」

今日の天気は、晴れいつもと同じだがその日は、何かが違っていた。

「いつてきます」

ここで自己紹介をしておこう。

俺の名前は勝^{かつ}マサル市内の中学校に通う14歳

これから書く事は俺の身におきた本当の事である。

「8時まであと5分」

と放送がなり

「急げ！ほら走れ！」

と先生が追い込みをしている。

見慣れた風景だったがいつもとは違っていた。

べつに外見が変わっているというわけではない。

ただその日のみんは、なにかおかしかった。

キンコンカンコン

「よし授業終わり！前田一緒に帰ろうぜ！」

と声をかけたが前田はふらふらと校庭に向かっていた。
いや！前田だけじゃない、クラスの皆、いや全校生徒、先生達も校庭に行き怪しげな紋章のような物を取り囲んで、呪文のような言葉を繰り返し唱えていた。

すると紋章の真ん中が開き、目の前が真っ白になった。
目を開けたときには皆消えていた。

家にも、ゲーセンにも、カラオケにも、誰もいなかった
俺は、いつの間にか学校に戻っていた。

「それにしてもこの紋章みたいのは何なんだ？」

考えながら周りを歩くと1冊の本があった。

「なんだ？この本？」

と思い開いてみると校庭に書かれている紋章と同じ物を見つけた。
その紋章の説明文にはこう書かれていた。

「魔王フィルの復活に使う大量の生け贄が必要である

また生け贄は別世界に飛ばされそこで魔王の生け贄となる」

この説明文を読んだあと俺はあることを思いついたそして急いで別世界への行き方を調べた。

「どこにある・・・ん・・・ん・・・あったこれだ」

「別世界への行き方

まず魔法陣を描き自分のパートナーとなる精霊との契約をする。その後移動用の魔法陣を描き次の呪文を唱える」

そう俺が考えたのは、別世界に行き皆を助けようという考えだった。
そして早速俺は本に書かれたことを実行してみた。

「まずはこれだな」

と思いつつ精霊を呼び出してみた。魔方陣から炎がでて
火柱がたちその中から人の形をした炎が出てきた。

「ふあゝ・・・ん・・・お前が俺を呼んだのか？」

「ああ、そのとおり、俺が呼んだのさ」

「ほくたいしたものだな子供で俺を呼び出したのは二人目だな。と

ここで俺を呼び出して何のようだ」

「お前を呼んだのは、俺のパートナーになっってもらって 別世界へ導いてもらう為さ！」

「別世界って行くといつても別世界の名前が、 わからないといけないぜ！」

「名前ならわかってる。 その名前はファンタクスだ！」

「ほく魔王でも倒すのかい？」

「お前には関係ないだろ！」

「いや俺はパートナーになるんだ極力危険な場所には、 行きたくない。 まあファンタクスならいいだろうよし魔法陣を描け！ さっさといくぞ！」

「わかった・・・ところで名前は？」

「あ・俺の名前か？ 人にものを尋ねる時はまず自分からだろ」

「俺は名前は、 勝マサルこれでいいだろでおまえは？」

「おれはファレイルよろしくなマサル」

「こちらこそ。 さて魔法陣も描いたしいっちょいきます かファンタクスに！」

といい終わると同時に目の前が真っ白になった。

(第2章) に続く

第2章

題名のない物語（第2章）

ファンタクス到着そして初めての仲間

「あいたた・・・ここは・・・どこだっけ多分ファンタクスだと思っけど」

「お目覚めか？」

「お前は・・・えくと・・・そうだファレイルだ」

「おいおい人の名前くらい覚えとけ！」

「なんだよ、一応覚えてたじゃん！」

「まあ、いいとにかく行くか」

「いくかって・・・どこに」

「見えないのか？あの町だ！」

よくみると霧の向こうに、町いや村と、いったほうがいいかな？まあ一応町があつた。

「あれは確かパンクスだったはずだ。運が良かったなパンクスには出会いの集会所があるはずだ。多分お前の仲間になってくれるひとがいるはずだ！」

「ふ〜ん、まあ早いとこ行こうぜ」

「ああ・・・ってはやいって俺をおいていくな！」

「わかつたってはやくしろよ」

「OK・・・マサル気をつける後ろに何かいるぞ！」

「え・・・うわ！！なんだこいつ？」

その動物いや物体といったほうがぴったりだな。

そいつは、緑色で半固体状の物体だった。まあ一応顔はあつたが・・・もうこれでやめとく・・・

想像すると・・・気持ち悪いから・・・

「わ！！！！」

いきなり体当たりを仕掛けてきたのでびっくりしたが

何とかかわした！そして落ちていた木の棒でおもいつきりぶん殴ってやったするとそのまま飛んで行ききにぶつかって崩れていった。

「大丈夫か？俺も戦うぜ！くらえフィルガ・・・あれ？」

出ないなんでだ？そういえばここに来てから力がでな 思ってたんだ！」

「これだ最後だ！くらえ！・・・よし倒したぞ！」

「マサル・・・すまない・・・どうやらここは、アダナが不足している」

「あだな？それってなに？あだ名のこと？」

「アダナとは、精霊がつかう魔法のエネルギーになる物質だ。ちなみに前らつまり人間が使う魔法のエネルギーとは、根本的に違う。その違いはまた今度さあ行くぞ」

「ああ・・・わかつたってなに先に行ってるんだよ」

「疲れた・・・」

「あと少しだからがんばれ！」

「うう・・・休ませてくれ・・・」

「パンプスに着いたらな！」

「そんな・・・」

そして・・・

「やった！到着」

「よしそれじゃあこれを渡しておく」

とってファレイルは指輪を俺に渡した。

その指輪には、ルビーがついていた。

「それを見せれば武器や防具を少し安くしてくれるぜ」

「ふん・・・あ！ここだ」

そこは出会いの集会所と、ファレイルが言ったままの名前だった。

「いらさ〜い」

「あんたは・・・初めてだね用件は？」

「え・・・あ！強そうな人」

「ほ〜．．え〜と．．そうじゃな．．この人はどう？」
そこにはこう書かれていた。

「名前 カイト

性別 男

一言 兄の敵討ちがしたい」

「どうじゃ？お前さんは、炎の精霊とパートナー契約
しているようじゃからの」

「いいんじゃないの？こいつにしようぜ！」

「俺も賛成！それじゃあお願いします」

「じゃあここに、いってくれ」

カランカラン

「よし行ってみますか！」

といいながらそこに書かれた場所にむかった

「ここか．．どのひとだ？あの人っぽいけど！」

「いやあいつじゃないぜ！多分あいつだ！」

といいその隣の子供を指差した

「え．．あいつ．．俺と同じくらいだぜ」

「おれにはわかるんだあいつは、風の精霊と、契約している」

「じゃあ．．お前を信じて．．」

「す．．すみません。お尋ねしますがカイトさんですか？」

「ああ．．僕ですがもしかしてマサルさんですか？良かった〜こいつ
い人だと思っていたので．．．」

「俺ですよ。良かったそういえばあなた．．風の精霊と契約を
していますか」

「してますけど．．なんでわっかたんですか？」

「それは、ファレイルが教えてくれたからだよ」

「よろしくなカイト」

「よろしくお願いします。そういえば僕の精霊を紹介してなっかた
ですね。できてマイル！」

するとカイトのペンダントからなにかが出て来た。

「やっぱり私マイルよろしく」

「よろしく、カイトそしてマイル」

こうしてあらたな仲間が加わった！

第3章に続く

第3章

題名のない物語（第3章）

「じゃあ兄貴の敵討ちの為だけにこんなたびを？」

そう訪ねるとカイトは、少しさびしげにこうつぶやいた。

「そうなんだ・・・僕の兄さんは、魔王の復活を予期していたんだ・・・だから魔王の手下のスモンクスって奴に殺された・・・だから・・・僕はスモンクスと魔王を倒そうと思ったんだ！」
といい終えてから少しなみだ目にカイトはなっていた。

「ごめんつらい事思い出させて・・・」

「そんな事ないよ！ところで僕のあげた剣どう？使いやすい？」

俺はカイトと会ったときに「重くて僕じゃ使えないから」といって剣をくれた。

その剣は、俺には軽くもなく重くもなくちょうどいい重さだった。

「うん！使いやすいよとつても！」

「よかった！あ・・・あれは森？あの奥かな？アリゾナって町は？」

「いこうぜ！地図どおりならあつてるぜ！」

森の中は、暗く道中魔物多く出た紹介すると・・・（したくないけど）

たまねぎの形をした奴や猿に尻尾を4本足したのや・・・まあたくさん、おかげでかなりの時間を費やしてしまった。

「今日は寝ようよ・・・マサル」

「そうだな疲れたし」

「ちょっと待てもう少しで付くぞ！寝ちまうのか？」

「ファレイル・・・そんなこと言ったつてもう歩けないよ・・・」

「そうよ！夜更かしはお肌に悪いのよ！」

「3対1で今日は、野宿に決定・・・お休み」

「お休み」

次の日

「おあゝ・・・おはよう」

「おはよう！昨日は眠れた？」

「まあまあかな？」

「そう・・・じゃあアリゾナに向け出発！」

アリゾナにはすぐに着いたが・・・

「えゝなんで入れないの？」

「今、村で問題が起きているため村への立ち入りは禁止だ！」

「問題って何？」

「あ・・・近くの池に魔物が住み着いていてその親玉が倒せない事だ・・・って聞く意味あつたのか？」

「じゃあさ、もし魔物の親玉いなくなればさ入れてくれる？」

「ああ・・・別にいいが・・・お前らが何とかしてくれるのか？」

「いあや・・・ただ聞いただけさ」

「ここか・・・魔物が出る池って言うのは」

「マサル・・・もしかして倒す気その魔物？」

「そうだけど、もしかして怖い」

「いや・・・そういう・・・わ・・・けじゃ・・・ないけど」

「そうならいいけど・・・うんゝどうやら出てきたみたいだぜ・・・
でかいな・・・かえるみたいだけだ」

「くるよ・・・気をつけて」

「わかつてるって」

と言い剣を抜き飛び掛っていった。

「アブね」

飛び出してきた舌パンチ一（勝手に考えたんだが、うゝんなかなか
ぴったり！）をかわし思い切りきりつけてやった。すると舌は真っ
二つになりどろどろ溶けていった。

「くそ・・・まだ倒れないのか？」

もう何度もきりつけカイトの魔法を当てているのに苦しみもしない・

「くらえ!!ファニス」

と唱えると同時に火の玉が飛んで行った。だがはじかれて岩のほうへ飛んでいったするとなんと

かえる野郎が苦しみ出した

「どうなってんだ・・・」

「もしかしてマイルお願いあの岩を風で移動させて」

「えっしょうがないわね・・・フィレイルあなたも手伝って」

「めんどくせえまあマサルとカイトのためだしな・・・」

「ありがとうフィレイル、マイル」

ドスン

しばらくすると岩が落ちてきた。

「いくぞ!!」

かえるの攻撃をかいくぐり岩にありつたけの力をこめて攻撃したするとバキンと音が鳴り

岩が砕けた!

「げろろろおおお」

かえる野郎の声が響き渡りそして黒い塊となり溶けていった。

「やった!倒したぞ!これで村に入れる」

「ふっ疲れた・・・今日は休んで明日またアリゾナに行こう」

「そうだな・・・それじゃ寝るか」

「賛成あたしも疲れた」

「お休み・・・みんな」

ぐっぐっ

(第四章)に続く

第4章

題名のない物語（第4章）

「おぬし達、なのかあの怪物を倒したのは？」

「は、何度も言ってるんですけど」

「本当に本当なのか？」

俺たちは、魔物を倒したところを村人に目撃されて、村長の家に連れて行かれた。

「このものたちです！私とはどめの瞬間をこの目で見んですよ！」

「ほ、ところでもう1体魔物が居て困ってるじゃ、お主ら倒しては、くれんかの」

「は、まあいですが、」

「本当か？よしこれをもつていけ！」

といわれ緑色をした剣・鎧・兜・盾を貰った。

「これは、この村の宝、大地の剣・鎧・盾・兜じゃ！」

「僕には無理かな重そうだし」

「じゃあ俺が」

着けてみたがなかなか良かった。

「じゃおぬしにはこれを」

と言いつは、杖とローブを持ってきた。

「これは、大地のメイスと衣じゃ！持っていけ！」

「ありがとうございます。じゃあ明日出発します」

「よろしくの村の北の神殿にいるからの、あ！言い忘れていたが村の兵士長も一緒に行くからの」

次の朝

「あなたがここの兵士長ですか？」

「そうだがどうかしたか？」

「いや、女の兵士長とは珍しいなと思って」

「おまえ、私を甘く見てるな」

「いや〜そんなわけじゃ・・・」

彼女は、名前をブカレストといい、ほっそりとしていてどうみても「強そう」とは思わなかった。

だが意外な事に彼女は、強かった・・・

彼女は魔物の急所を攻撃をかわしながら的確についていく、暗殺剣の使い手と同時に弓の名手だった。しかも大地の精霊と契約を結んでいるらしい・・・

「強え〜」

「本当だね!」

「う〜やる!!あの姉ちゃん」

と言いながら俺たちもばっさばっさ切り倒したて行く

「ふ〜疲れた・・・」

「付いたな。さっさと行くぞ!」

「ちょ〜タンマ」

「何だ!もうへばったのか」

「何だと!分かった行つてやるぜ!」

「も〜うマサル・・・皆の事考えてよ」

「俺はいいんだけどな」

「あたしもうだめ」

「ほらどうした!ファレイルだけか?元気なのは?」

神殿の中は湿気が多く、じめ〜としていた

「うわ〜気持ちわる」

「そんな事言つてないで行くぞ!」

俺たちは神殿の中を進んでいった幸い一本道だった

「あれか?」

「そうみたい・・・」

そいつは、一言で言えば野菜の塊に王冠をかぶせた物体…名づけてベジタブルキング!」（以下ベジキン）

俺は剣を抜きそつと近づいていき重い一撃をくらわせてやった！

「ぐをあたおく」

意味不明の言葉を叫び、手一（大根）からニンジンがミサイルのようにててきた！

そのニンジンをぶつた切つて飛びかかりもう一撃食らわせてやったそれと同時にカイトの魔法が炸裂した！

魔物はまた奇妙な叫び声を上げブカレストに、ネギソードを放つた。一（その名の通りネギを剣のように振り落とす攻撃）それを鮮やかにかわし矢を放つた！矢はベジタブルキングの目に直撃！だが・・・。べ時キンは周りが見えなくなるとネギソードをめちやくちやに振り回した。

「あぶな！」

「あれじゃ弓も魔法も弾かれちゃうよ」

「くそ・・・」

「俺様の出番だな！」

「フィレイル何をするんだ？」

「剣に俺の力を注いで攻撃する」

「するとどうなるの？」

「あの手を燃やして、動き止まった時に全員で攻撃する」

「んゝそれっておれものすゝゝゝゝく危なくない？」

「大丈夫、下の方に少しだけ隙間があるから」

「そこに入れて？」

「そうだけど？そうかした？」

「俺じゃないとだめ？」

「このなかで一番重装備をしていて一番屈強な人は誰でしょう？」
周りを見渡し確認すると答えた

「俺か？仕方ないやるか！」

「さすが！じゃいくぞ」

としばらくすると剣を炎に包み込まれた！それを確認すると俺はダッッシュで手の下にもぐりこんだ。そして思いっきり切り上げた

「いまだ！やれ！」

カイトの魔法とブカレストの矢、俺とフィレイルの合体技名づけて
火炎斬りが炸裂した！

「亜じゃケアリたつあ………@p」

意味不明 + 奇妙な叫び声を上げ黒い液体となって消えていった

「おわった！！」

「あれは何だろう・・石碑？」

「まあ後で見に来ようぜ」

「そうだね」

「帰るか」

おれたちは、アリゾナへ戻っていった。

(第5章) に続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4313c/>

題名のない物語

2010年10月28日07時50分発行